

頼し、一同入浴す、此家の浴室、敢て數奇を凝せしと云ふには
あらざれど、近く改築して未だ成就せず、去あれ、夏なれば、
四方をつ開きの風もそよ／＼、加之、湯の溫度亦恰適いと心地
よし、浴後茶菓子に雜談笑話する裡、發足の準備整ひしを、下
女告げ來るに、皆々、身輕に仕度館を出づ、此處一等溫泉館紅
屋の前にて、盛裝の舞子妓に會ふ、一統恍惚たり、歩する事半
里斗り、日は出て居るが小雨となる、蕎麥の花に松林雜りの徑
を行くなり、折柄唄ふ者吟ずる者あるに、足の運びも忘れつゝ、
何時しか崎浦へと着けり、雨天なればにや、海模糊として煙り、
海面油の如し、風情面白き老松の間に、漁村の點綴隱現する態、
繪ならめやは、崎浦より浦續きに梶浦へと廻る、時正に午時、
空腹を感じる事甚敷、此わたり、一人ならんには寫生せんと思
ふ好景少からず。一小屋あり、濱女漁男の多く出入するに、赴
き見れば、今日は福井より雲丹買ひの來り、其算用拂ひをしつ
ゝあるなりき、此處より漁舟を艤し、安東浦迄の海路を取り、
奇勝を賞てつゝ晝食せんと議一決し、賃銀を掛引せしに半時余
をも要しぬ、今や一行乗舟せんと欲せしに、荷持の老人のみは
諾せず、浦づたいに、到着地迄は徒歩すべしとて別れたり。
乗船の其頃より、空一齊に霽れ渡り頓に暑し、海水恐敷迄に清
く、數尋の奥底迄、一塵の汚物無く、其深甚、其神秘的に朧明
なる、手足戰慄す、藁は舟夫が遺る櫓のまに／＼、紺青、藍碧、
褐赫色と搖亂す、甲君は朝日ビールとサイダーを舟縁に吊るし
て冷し、行厨を開き、且つ飲み、且つ喰ふ、折角の馳走たる大

章魚の甘煮、鯛の付焼よりも、福神漬を喜び競り食をせり。

松江展覽會報告

去る十一月三日四日の兩日當地有志者武部、福島、奥村三氏發
企となり城山公園元 東宮殿下御座所たりし興雲閣に於て第二
回洋畫展覽會を開催せり、山陰の地に於て未曾有の舉なりしを
以て兩日共非常の觀覽者ありたり、時恰も天長節祝賀會同處階
上に開かれたるを以て官民の紳士數百名の見物あり、洋畫趣味
普及上頗る好結果を得たりと信ず、出品總數百余點少許の油繪
パステルを除くの外水彩にして松江の外東京、安來、平田、濱
田、米子よりも集まり、會友竹下一郎氏も出品せられたり。

(奥村)

白馬會展覽會の水彩畫を觀て

大阪 夏月生

十一月一日より十日間、第二回白馬會洋畫展覽會は、當地三
越吳服店内に開かれた。

陳列された作品は誠に調子良き傑作揃ひにて、——中には多少
怪しいものもあつたが、——僕の胸を大いに躍らせた。多くは
色彩は、豊富で、活氣に富んで居た、惜むらく、水彩畫に三宅
氏作品が一點も無かつた爲に、少し寂寞の感がなきにしも非ず
であつた。然し、湯淺氏の作數點が、この憂を解くに充分であ
つた様に思ふ。一此内で、僕が良い出来であると思つた數點を、
指摘して見やう。——但油繪を除く。——

テームス河畔（南薫造氏）誠心持のよい無難の作であつた。只雲に少し首を傾けた。其他、氏の英國田舎風景もよい、ペナンの家は、少し色があくどく、多少の失敗は免れない。水車（湯浅一郎氏）氏の作三宅氏の色彩に似て非なるもので、誠に活々とした心持がする。殊に此圖は僕が一番良いと思つた。他の作も皆僕に深き印象を與へた。

小松喜代子氏の作四點は、女性に適した圖柄で、優しかつたが少し色彩の何處かに弱い處があつた。

月島スケッチ（吉田喜藏氏）素人好のする作で無難であると思つたら、果して赤札が付いて居た。

其他、随分佳作も多かつた、又中にはいかゞわしい駄作もあつた。それから、東季久氏の鉛筆畫が、五點一とまとめにしてあつたが、展覽會で見る丈の價はなかつた様である。

油繪には、参考品として、外國大家の作三點あり、又、黒田、中澤、跡見等諸氏の名作も澤山あつた。

嶽陽美術會展覽會を見る 深澤 信

嶽陽美術會展覽會は、静岡市好畫者數名の主催によつて静岡物産陳列館樓上に於いて、開かれた。

九月十五日

たま／＼細雨は落ちぬ。午後二時陳列館に向つた。會場は七室に分れて居る。

第一室は大部水彩畫にして、中に二三葉の色鉛筆畫及びパステ

ル畫があつた、水彩畫には三宅氏の『小路』、『月夜』及び、『田舎家の裏』、岡氏の色鉛筆畫、『乙女の顔』、安藤氏の『おぼろ夜』等見る者をして、皆其の精巧なるを感じしめた。或る者は、土佐派の繪と比較して、頗りに感心して居る。第二室以下七室迄は大部油繪に其の席をしめられた。中に小さなパステル畫もあつた。

第三室と覺える。和田氏の『大島の風俗』、實に天下の大作であるまいかと思はれた。牛小屋の構造より、立てる婦人の姿は一目見て、大島の風俗を思ひ出さしむ。又黒田氏の菊、某氏のエジプトの月、模寫なれど、原畫はターナー氏の筆になれる難波船を見ては、一度も上京せぬ余をして、大平洋白馬兩會に、入らしめた感をおこさせた。

八幡紀行

大阪 夏月生

予は、天長の佳節朝飯もソコ／＼に、宅を出て、谷村氏を誘ひて、天満橋なる京坂電軌停留所に馳け行き、忽ち車中の人となる。

やがて、汽笛と共に車は徐々と進行をはじめ間もなく蒲生を過ぎ、市内を遠く背に見る。此ほとり田野の彩は華やかなる、オレンジ色となりて、その盡くる所、信貴、生駒の諸山、煙の如く浮び出て、秋氣天地に満てり。

程もなく、八幡に下車して、足を淀川へ運ぶ。此附近風光一變して、廣漠たる淀川、洋々と流れ、八幡、山崎附近の連山、